

【実践報告】

コミュニケーションな 初級日本語教材の開発をめざして

片山きよみ・上村 文子・舛井 雅子・柳田恵里子

要 旨

初級教科書の作成を初めて2年半、ようやく「試用版」の完成にこぎつけることができた。新学期からの試用を前に、ここで一度、これまでの作成過程を振り返ってみることによって、今後の課題をさぐりたい。

私達が目指したのは、熊本で学ぶ留学生に「日本語でコミュニケーションするときに必要な文法」を教える教科書作りである。初級レベルの学習者が「話す」のに必要な文法項目は何か、従来の初級教科書の文法項目の見直しから始めた。何を教え、何を教えないか、どのような順序で提示するか、さらに、その文法項目を各課でどう教えるか、内容についての検討を重ねてきた。このような試行錯誤の過程の中で、私達がこだわった点、作成の方針にした点などを整理し、新教科書の概要と特徴を示した。最後に、参考資料として、「試用版」で扱う文法項目一覧および主要教科書との対比表を付けておく。

1. はじめに

私達が「熊本版の初級教科書を作ろう」と一歩を踏み出してから、すでに2年半が経とうとしている。何度か挫折しかけたこともあったが、何とか最後まで一応の形は完成させることが出来た。この春休みの間に全体的に見直して、国際化推進センター国際語学部門としてスタートしたばかりの来年度、新しい初級クラスで試用を始める予定になっている。

1995年に熊本大学留学生センターが開設されてから、研修コースの教科書は『SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE (以下 SFJ)』が使われてきた。しかし、SFJの内容が多すぎて授業時間が不足すること、解説書が英語版しかないこと、取り上げられている話題が古くて学生のニーズに合わないものがある等の理由で、いつの頃からか「熊本・熊大版のテキストが欲しい」という声が挙がるようになってきた。熊本の地名が登場したり、熊大キャンパスが舞台になった話題が取り上げられていれば、学生のモチベー

ションも上がるはずだと誰もが思っても、いざ作るとなると様々な障壁があり、これまで実現には至らなかった。

そのうちに、研修コースの学生数が漸減し、単独でクラスを設けることが困難になって、2004年度から大学院生など学内の他の学生も受け入れられる体制に変えることになった。それで、これまでのようにSFJを使って会話と文法合わせて週15時間というカリキュラムを組むことは出来ず、文法と会話の授業を分離せざるを得なくなった。SFJは会話の教科書としては継続して使うが、分量の多いSFJの文法は、時間数の関係で使用するのは無理だった。それで、コンパクトにまとめられた文法の教科書として『語学留学生のための日本語（以下語学留学生）』が、初めて採用されることになったのである。

このような事情で使用が決まった語学留学生だったが、この教科書には解説書がないので、当時の担当者4名が分担して自分達で作らなければならぬということであった。新学期のスタートまであとわずかという時期に決まり、何とか授業に間に合うように解説書を作っていくという、文字通りの自転車操業であった。こういう状態であったので、全体の統一を図るとかミス进行を細かくチェックするなどの余裕はなく、その後何度か使っているうちに自分達でミスに気づいたり、学生に指摘されることもあった。必要に迫られ、即席に作られた不十分な解説書ではあったが、結局、私達が今回の教科書作りをしようと決心したのは、この解説書があったからである。

当時の担当者や、その後授業を担当してこの解説書を使った者が集まって、ミスをチェックし全体の統一を図って、いずれ完成版を作らなければという話は出ていた。しかし、その後、様々な理由で初級コースでは語学留学生は使用されなくなってしまった。¹⁾ 自前の解説書を作るのは初めての体験でもあり、授業の進捗状況に追われるようにして作るのは予想以上で大変であったが、種々の初級教科書の解説を改めて見直すことによって、いい勉強にもなった。決して満足できるものではないが、このようにして作り上げた解説書がこのままお蔵入りするのは残念で、何とか利用できないか。この解説書を生かせるような教科書を、自分たちで作ればいいのか。これまで懸案であった熊本版の教科書を作ろう。そして、解説書も不十分な部分に手を入れて、完成版に仕上げよう。今、振り返ってみると、今回、初級日本語教材を作ることになった経緯は、大体こんな流れであったと思う。

次章で詳述する『コミュニケーションのための日本語教育文法』（野田尚

史・編)を全員で読み、「実際のコミュニケーションに役立つ熊本版の文法教科書を作る」という共通認識を確認した程度で、充分な準備期間もなく、作成に入る前の論議も十分とは言えないままスタートしたこの教科書作りは、今思えば少々無謀なものだったかもしれない。メンバーが各自の経験に縛られて、議論して統一されたはずの作成方針が途中で揺らぐことも多々あり、もっと時間をかけて十分に議論をしてから取りかかるべきだったと反省することもあった。2年半の歳月をかけて何とか仕上がったこの教科書だが、「作成方針の揺れ」がその内容に表れているのは、私達も認識している。今後、試用を重ねながら不十分な箇所を修正していくことになるであろうが、以下、「『コミュニケーションのための日本語教育文法』から学んだこと」、「文法項目とその提出順序の決定まで」、「各課の作成方針」について記し、試用版作成の流れを確認する。

2. 『コミュニケーションのための日本語教育文法』から学んだこと

文法積み上げ式からコミュニケーションなものまで、多くの日本語教科書が出版されてきたが、そこで取り上げられる文法項目はこれまでほとんど見直されてこなかった。『コミュニケーションのための日本語教育文法』(以下『コミュニケーションのための』とする)(野田尚史編、2005)で、野田は、「日本語学」に依存した日本語文法から脱却し、学習者の目的に応じた新しい日本語教育文を構築することを提言している。

同書によって、私達は初級教科書で扱う文法項目の取捨選択や提示順の決定には、従来とは異なる視点からの検討が必要であるとの認識を新たにした。また、示された具体例を私達の教科書ではどう扱うかという議論を通して、新教科書の目指す方向性が定まってきたように思う。

野田があげる「日本語教育文法の方針」の中で、特に留意したのは次の3点である。

1. 正確さ重視の文法から目的を達成する文法へ
2. 形式を基盤とする文法から機能を基盤とする文法へ
3. 「文の骨格中心の文法」から「相手とのコミュニケーションに直接に関わる伝達部分や社会言語学的な能力を重視する文法へ」

ここでは、どんな文法項目を教えるか、どんな順序で提示するか、どんな内容にするかという点について、『コミュニケーションのための』による提言を軸にまとめてみたい。

初めに、新教科書の対象および到達目標を明確にしておく。対象とするのは、熊本在住の留学生で、日本語を初めて学習する、あるいはごく初級レベルの学習者。将来、中級・上級へと進むことも考慮に入れる。4技能の中では特に「話す」に重点を置き、日常生活において日本語でコミュニケーションするために必要な文法項目の習得を目指す。

2. 1. 何を教え、何を教えないか

「やりもらい」の「あげる」「くれる」「もらう」、条件表現の「と」「ば」「たら」「なら」、直接受身と間接受身、尊敬語と謙譲語などは、ほとんどの初級テキストで取り上げられており、しかもセットで教えられることが多い。このことを、野田は、日本語教育での必要度とは無関係に関連する項目を揃えて出そうとした体系主義の悪影響だと言う。『コミュニケーションのための』では、初級学習者が発話する機会の少ない項目や、教えてもなかなか定着しない項目、誤用によって誤解を招く可能性のある項目などは教える必要はないとして、「やりもらい表現」の解体、条件表現は「たら」のみで十分とし、「と」「ば」「たら」は不要、さらに「謙譲語」「命令形」「間接受身」「使役」についても初級レベルでは教えなくてもよい、などが提案されている。

確かに、これらは初級学習者には習得がむずかしい項目である。しかし、だからと言って初級で全く教えなくてもいいのだろうか。「命令形」や「ば」「と」などは学習者自身が発話することは少なくとも、耳にすることはあるだろうし、聞いてわかるぐらいにはなっほしい。また、「てあげる」も目上の人に使うと失礼だから教えないというのではなくて、教えた上で、目上の人には使わないということを情報として与えておけばいいのではないか。初級の文法項目からはずしてしまうのではなく、繰り返し何度も取り上げることによって、定着をはかりたい。

しかし、初級であれもこれもと詰め込みすぎると学習者の負担が大きくなるのも確かである。この点については、使えるようになることを求める項目、紹介程度に留めておく項目、全く取り上げない項目など、それぞれの文法項目の必要性や難易度に応じて扱い方を変えることで対処することにした。

取り上げないことにしたのは、「つもりだ」のような表現に関する項目である。『コミュニケーションのための』でも、「つもりだ」は実際に使われている形式を反映していないとして、教えなくてもいい項目にあげている。前

掲の基本的な文法項目は、たとえ正確に使えなくても初級で一通り教えておきたいが、「つもりだ」のような表現に関する項目は中級になってからでもよいと判断した。このような観点から、取り上げなかったのは次のような項目である。「てほしい」「らしい」「はずだ」「わけだ」「てある」「てくる」「ていく」「てみる」「ことにする」「ことになる」「という」「たあとで」など。ただし、学習者が耳にする機会があると思われるものについては、課末の【会話】に入れたものもある。

また、『コミュニケーションのための』は、これまでの初級の文法項目にはないものでも、学習者にとって必要な項目は入れるべきだと主張する。「ないです」は初級の文法項目ではないが、実際の会話では「ません」より使う頻度が多く、学習者の負担も少ないため、初級では「ません」より「ないです」を教えるべきだと言う。実際に話されている言葉を教えることは大切だと思うが、基本的な文法項目はきちんとおさえておきたいと考え、従来通り「ません」を教えることにした。

2. 2. どのような順序で提示するか

野田は、従来の日本語文法のもう一つの悪影響として形式主義をあげている。これまでの日本語教科書では、同じ形式に2つ以上の機能がある場合、まとめて導入することが多い。たとえば、動詞のテ形の導入のあと、「もいいです」「てはいけません」「ています」などテ形を使ったさまざま表現を次々に導入する。あるいは、「写真を見えています」「太っています」「英語を教えています」など、意味の異なる「ています」をいっしょに教える。これは教える側の都合であり、学習者の側に立った提示順だとは言えない。文法の提示順は形式によるのではなく、学習者の必要に応じて決めなければならないという点は私たちも同感であり、何の必然性もなく同じ形式だからというだけで、まとめて提示することはできるだけ避けたい。

従って、テ形の導入時に取り上げるのは、使用頻度の高いと思われる「V₁て、V₂て、V₃ます」と「てください」の二つにとどめた。また、「あげる」「くれる」「もらう」は、本動詞としては、「あげる」と「もらう」を他の3項動詞といっしょに提示し、「くれる」は別扱いにした。「てあげる」「てくれる」「てもらう」については、行為者が主語に立つ「てくれる」を、行為の受け手が主語に立つ「てもらう」より先に教えることが提案されているが、この点について、結局私達は結論が出ず、従来通り同じ課で扱うこと

にした。さらに検討が必要かもしれない。

文法項目の提示順は、形式によって決めるのではなく、学習者の必要に応じて決めていく。学習者にとって必要な項目とは、コミュニケーションに必要なかどうかという点である。少し難しいと思えるような文法項目でも、学習者が使う必要があると判断したものは早い段階で提示していきたい。自分や国のことを話す段階から、活動の場が広がっていくにつれて、求められる発話内容も変わってくる。その時々に応じた会話ができるような文法項目を提示するのが理想である。

2. 3. どのような内容にするか

熊本にきた留学生が、これから経験すると思われるような場面を想定する。練習問題は単なる置き換え練習ではなく、実際に発話しそうな会話を考え、コミュニケーションストラテジーとして役に立つような表現をなるべく取り入れたい。また、中級、上級と進んでいく可能性のある学習者には、その基礎となる文の骨格もきちんと教えたい。そのために、学習者がわかりやすいように、文法項目を構文形式で提示した。また、各課の最後に【会話】をつけて、実際に使われる場面を示した。

野田は、「文の骨格中心の文法」から「コミュニケーションに直接に関わる伝達部分や社会言語学的な能力を重視する文法」へという方針を示しているが、私たちは基本的な文の骨格を提示しつつ、コミュニケーション的な内容を加えることによって、学習者が「話せる」ようになる教科書作りを目指したいと考えている。

3. 文法項目とその提出順序の決定まで

本章では文法項目の選択と提出順序決定までの経緯について述べていきたい。

3. 1. 文法項目の選択と経緯

教科書の作成にあたり、まず初級シラバスに沿って文法項目の取捨選択を行った。選択する際、野田（2005）の指摘にもあったが、私達も「日本語でコミュニケーションするときに必要な文法」であることを第一に心がけた。文法項目の提示と練習問題の作成に当たって、語彙は大学や日常の生活で必要であるものを選ぶようにする。1つの課の内容量を平均化する。また、文

法項目には練習し定着を目指す表現と理解できればいいものがあるが、後者は教科書の各課に設けた【会話】で取り上げる、といった点を確認し、これらを前提としたうえで文法項目の提出順序を決定した（以下、「計画案」とする）。計画案にあげた文法項目とその提示の仕方から、本書のいくつかの特徴を次のようにあげることができる。

- 1) 名詞文→動詞文→形容詞文の順に提出し、早い時点での発話を促す。
- 2) 「自分のことを話す」という課を設ける。
- 3) 辞書形とタ形を、テ形より先に導入し、普通体を早くから意識させる。
- 4) 依頼や許可など使える表現を多く取り入れる。

文法項目の一覧は後掲しているが、本章では各課の作成作業のことを振り返っておきたい。各課の作成は、メンバー各自が担当課の試案を持ち寄り検討会議で意見を出し合っては修正するという形で進められた。その過程で当初の計画案を見直さなければならないことも多かった。見直しは、ひとつには課の量的な問題であるが、また、学習者の負担を考えて文法項目を削除したり【会話】へ移動させたりしたものもある。一方、当初は練習問題を考えていなかったが、文法項目として新たに取り上げたものもあった。ここでは、私達が特に検討を要した項目について、その経緯の概略を述べる。

1) 基本動詞の提示 (3・4課)

動詞導入は、基本動詞「行きます・来ます・見ます・聞きます・読みます・書きます・買います・食べます・飲みます・勉強します・練習します」を一度に示し、「助詞+動詞」の形をとる動詞の体系と構造を理解させてはどうかと考えた。しかし、新出の11語と助詞の習得は、初めて動詞の活用に接する学習者にとって負担が大きいであろうと判断し、「行きます・来ます」を3課に移した。

2) 「時刻/時間」表現と「曜日/月日」表現 (5・6課)

当初は1つの課にまとめていたが2つの課に分け、「時刻/時間」表現と「曜日/月日」表現を整理して提出することにした。5課6課は動詞の運用練習のところである。そこで、「時刻/時間」「曜日/月日」に加えて目的を表す「Vに行きます/来ます」もここに提示した。もう少し後で導入する教科書が多いが、この文型を早く導入することによって、動詞文で表せる表現が広

がると考えたからである。例えば、明日何をするかという問いや、留学の目的を聞かれたときの答えとして使えるであろう。

3) 「やりもらい」および「3項動詞」(11課)

授受動詞の提出については、「もらう」「くれる」「あげる」をいっしょに提示すべきか、また、扱い方の比重をどうするか、「あげる」は初級で必要か、といった問題もあるが、本書では、「あげる」「もらう」をペアで提示し、「くれる」は行為の授受の課で扱うことにした。このほか「NはNにNをV」である「教える」「送る」「貸す」「借りる」「電話をする」を取り上げる。

4) 動詞の活用一辞書形とタ形の導入(12課)

動詞の活用形として最初にテ形を導入する教科書が多いが、本書では、まず辞書形とタ形を「日常会話で使うカジュアルな形」として紹介することにした。また、当初は、ナイ形もこの課で教えることにしていたが、学習者の負担が大き過ぎると判断して、テ形を導入する14課に移動させた。

5) 動詞の活用一テ形の導入と練習(14課)

テ形の作り方を練習したあと、まとめてテ形構文を導入する教科書が多いが、本書では初級学習者が使う機会が多い「V₁て、V₂て、V₃ます」と「Vてください」にしぼって提示する。「継起」のテ形導入により、丁寧さとテンスに関わるのは文末だということを認識させる意図も含む。同じ課で、ナイ形も導入する。「Vーないてください」もここで扱う。

6) 引用節など(17課・18課)

当初は、「～と思います」「～Vう(意向形)と思います」「疑問詞+か/～かどうか」を、まとめて提示したいと考えた。しかし、学習者の負担を考慮し再検討した。「は」「が」を整理する課である17課に、形容詞で扱うことになっていた対比の「は」を移動させた。取立ての「は」といわれるウナギ文は、文法項目としては扱わず【会話】で紹介する。一方、疑問引用節「疑問詞+か/～かどうか」については、この文型が必要になるのはレポート等を書く段階であることから、連体修飾節のなかで「疑問詞+か」のみ扱うようにした。「～Vう(意向形)と思います」は18課で導入する。また、当初紹介程度としていた間接話法のうち「～と言いました」を加えた。さらに、

【会話】でも早くに取り上げたいので「A/NA/Nになります」を、「～ようになります」とは切り離して18課に移動させた。

7) 「～んです」(19課)

「～んです」を使ったフレーズで、〈許可をもらう〉〈症状の説明〉〈相手の説明を引き出す〉という場面を具体例で実践的に練習させる課にする。日常会話での「～んです」の使用頻度を考えると、もう少し早く提出したほうがよかったかもしれない。

8) 「～たあとで」について(21課)

「～とき」「～てから」「～まえ」を同時に提出するが、本書では、「～たあと(で)」は取り上げない。その理由は、「～てから」と「～たあと(で)」はほとんど同じように使えるし、この二つの文型の違いを理解するのは難しいため、誤用してしまうこともあるからである。

9) 命令形・義務表現(23課)

大学での学習者には命令形はなじみが少ないかもしれないが、大学以外でのニーズも考慮して「静かにしろ」「静かにしなさい」「静かにして(ください)」の使い分けを、場面のわかる絵を使って紹介する。また、多様な義務表現に混乱しかねないので「Vてはいけません」と「Vなければなりません」のみを取り上げることにした。例文の中には「なければなりません」よりも「なければいけません」のほうがしっくり感じるものもあるので、練習問題の例文には「なければいけません」も入れておく。

10) 「Vて+やりもらい」(25課)

野田(2005)では『てくれる』が習得しやすいので『てもらう』より先に教える、また『てあげる』は実際に使用するのか?などの指摘がある。しかし、この課を組み立てる段階では、結局、従来の教科書同様に3文型を取り上げることにした。「～ていただく」「～てさしあげる」「～てくださる」は、野田(2005)では「省くか理解するだけで可」という指摘もあり、この点も検討した。その結果、研究室などで使用する機会もあるだろうし、日常会話で耳にすることもあるからということで取り上げることにした。しかし、使用語彙というより理解語彙として教えたほうがいいかもしれない。

11) 「～ながら」(29課)

「～ながら～」は、初め【会話】で紹介するだけの予定だったが、作成作業の段階で練習を入れたほうが良いということになり入れることにした。しかし、「～ながら～ないでください」の練習問題作成に苦勞した。実際に使うだろうという理由で考えた練習だが、初級で必要かどうか、今でも迷いがある。

12) 使役表現(33課)

できるだけ自然な文の練習を作ろうとするが難しい。受け身文や使役受け身文に比べ日本人が実際の会話で使役の表現を使用する場面が少ないからだと考えられる。そうだとすれば、初級の段階では文型の紹介だけでよいかもしれない。また、この課の文型4に「～V(さ)せてください/ないでください」を実際に使う表現だからという理由で導入したが、「～てもいいですか」(19課)で代用できることを考えれば、【会話】での紹介だけで可とすべきかとも思われる。

13) 使役受身(34課)

使役受身を提示している教科書は少ないが、日常生活のなかで聞いているだろうことを考慮し使役受身も取り上げた。次のステップへつなぐ項目でもある。

3. 2. 取り上げる文法項目一覧

以上のように検討を重ね、本書で取り上げる文法項目とその提出順序が別表(「文法項目一覧」)の通り決定した。市川(2005)所収の「主要教科書との対応表」に倣って「試用版教科書と主要教科書との対応表」を作った。

各課の作成方針および作成意図については次章に譲る。

4. 各課の作成方針

本書は課ごとに分担して練習問題を作成したあと、全員で検討を行ったが、練習問題作成にあたっては、学習者が実際に発話しそうな文、自然な会話に近い文を練習問題にするよう留意した。また、大学や日常生活で必要となるような語彙を選び、繰り返し同じ言葉を使用して、文型と語彙が記憶に残る

ことを目標とした。

以下、各課それぞれの作成にあたっての方針を述べる。

第1課

- 1) 自己紹介の表現を練習することによって、「NはNです」構文の定着を図る。
- 2) 国・趣味・専門に関する語彙は一括して示すのではなく練習問題ごとに提示する。

第2課

- 1) 練習に学生証、外国人登録証など、来日間もない学生に必要と思われる語彙を入れる。
- 2) 「これは何ですかー時計です」という問答は不自然である。「日本語で何ですか」とすることで不自然さの解消を図る。

第3課

- 1) 部屋番号や住所などは、すぐには使えないかもしれないが、理解語彙として【会話】で紹介した。

第4課

- 1) 動詞＋格助詞「を」をとる動詞文を、身近な名詞を使って練習する。
- 2) 「きのう／今日／あした」を用いて過去・非過去の文およびそれぞれの否定の文を示し、動詞文の構造を理解させる。先に提示した名詞語彙を繰り返し用いることで動詞文の定着を図る。
- 3) 「何もVません／ませんでした」を問答の形式で練習し、日常での会話に対応できるようにする。

第5課

- 1) この課では「場所」を表す「で」も初出なので、学生を混乱させないよう、手段を表す「で」は、日常会話で使う必要性が高いと思われる交通手段の用例のみを取り上げた。
- 2) 「よく／ときどき／あまり／ぜんぜん」－副詞は他の品詞に比べて項目として取り上げられることが少ないが、本教科書では、副詞にも着目したい。頻度を表す「よく」は使う機会が多いと思われる。

第6課

- 1) 時刻と時間を続けて提示することによって3時と3時間の違いを印象づける。留学初期によく聞かれる「どのくらい日本で勉強しますか」など

の問いにも答えられるようにする。

- 2) 目的を表す「Vに 行きます/来ます」は「明日何をするか」という問いや、留学の目的を聞かれたときの答えとして使えるように早い段階で導入する。

第7課

- 1) 形容詞の否定形は「なかったです/じゃありません/じゃなかったです/じゃありませんでした」の「～なかったです」形と「じゃありません」形、双方を入れた

第8課

- 1) 「たいです」の練習では、[NがV-たい] [NをV-たい] 自然な会話ではどちらも使われるので、[NがV-たい] にこだわらないこととする。

第9課

- 1) 2つのものの比較表現は、疑問詞「どちら/どっち」を使って、二つのものを比較させる。あわせて形容詞の定着と運用を促す。比較の上で頻度の高い「好きです」については他の形容詞とは別に示し練習させる。
- 2) 3つ以上のものの比較表現は、比較表現の導入とともに「どれ」「だれ」「どこ」「いつ」といった既習の疑問詞を用いることで、その復習もかねる。
- 3) 「家族のなかでだれが一番早く起きますか」のように副詞的用法が用いられている形容詞の比較についてこの課では扱わない。
- 4) 単独の比較文では「AはBより(ずっと)+形容詞」のみとし、混乱を招くので「AのほうがBより(ずっと)+形容詞」は教えない。
- 5) 比較の文では「～は～が～」文が現れることが多いが、本課では扱わない。

第10課

- 1) 「横」は位置詞として出していない教科書も多いが、「となり」と置き換えられない場面も多いので、加えた。
- 2) 「5つりんご、ください」のような誤用をしやすいので、助数詞の練習のあとで、「りんご5つお願いします」のような文の形での練習問題を入れる。

第11課

- 1) この課は補語を二つとる基本的な動詞を扱う。
- 2) 補語を二つとる動詞のうち「メールをする」は留学生にも便利な語彙で

あるので、【会話】で取り上げた。

第12課

- 1) まず、変換練習をし、次に日常の場面で使われそうな対話の形式で、ます形から辞書形・た形に変換する練習を設けた。この際、言い切りの形は不自然なので、文末に終助詞「よ」を付けることが多いことを（ ）で示した。
- 2) この課で初めて動詞のグループ分けを教えるわけだが、すぐに定着するのは難しいので、動詞をグループ別に分けて提示し、動詞が3つのグループに分けられることを認識できれば良しとする。

第13課

- 1) 普通体への変換練習のあと会話文を示して練習させる。
- 2) 12課同様、本課においても、対話形式での普通体の練習では不自然にならないように、終助詞「よ」をつけて示す。
- 3) 「これ何?」「今何時?」「誕生日はいつ?」など疑問詞だけで言い切る使い方にも慣れさせる。
- 4) 本課では新しい文型の提示は行わず、復習となる比較文や感想を尋ねる場面を用いて普通体での会話文の定着を目指す。

第14課

- 1) 「て形」と「ない形」を導入するが、ない形は、耳にすることが多いと思われる普通体の会話練習も入れる。

第15課

- 1) 現在進行中の「～ている」を扱うが、瞬間動詞の結果を表す動詞の中から、「持つ、知る、結婚する、住む」もこの課で取り扱う。
- 2) 文型提示に「いま、いつも、毎日」をつけることによって、「～ている」は現在進行中及び習慣を表すことを理解させる。

第16課

- 1) 語学の学習では、学んだことが使えるようになることが大きな動機付けになる。したがって、初級文法の半分が終わったこの課では、既習の辞書形・た形を使って、自己紹介などで使用頻度が高いと思われる表現を教える。
- 2) 実際の会話で、「私はNが上手です」と言うのは不自然なので、練習では「得意です」を使った。

第17課

- 1) 全体を取り上げて主題とし、その一部分の特徴を述べる場合に用いられる「～は～が～」文を教え、意見や感想を表現できるようになる。
- 2) 対比の「は」では、日常の会話の中でよく使われる対比表現を取り上げる。
- 3) 学習者にとって、「は」と「が」の選択は難しい。本課では、1) 述語に疑問詞がくるときは「は」、2) 主語に疑問詞がくるときは「が」、3) 疑問詞でも「いつ」は「は」も「が」もとらない、という3例を挙げるとともに、穴埋めクイズの形式で印象を深くする。
- 4) 「動詞・い形容詞・な形容詞・名詞+です」の普通体への変換表を付す。
- 5) 引用節「～と思います」を教える。思考内容を普通体に変換し、格助詞「と」を用いて文を作る。その次に学習者自身が判断・意見・考えを述べられるようになることを目指す。

第18課

- 1) 意向形を導入し、フォームの変換練習を行う。
- 2) 「～ましょう」の普通体は「～(よ)う」であることを示す。
- 3) 「意向形 と 思います／思っています」－意見を述べる「～と思います」とは異なり、話し手の意志や希望を表す表現であることを教える。
- 4) 本教科書に「Vつもりです」の文型は入れないので、「意向形 と 思います／思っています」を使って将来の意向を言えるように指導したい。「思います／思っています」の差異や「意向形+思っています」で第三者の意向も表現できることも紹介する。
- 5) 本書では、「言いました」のみを提示する。引用節はすでに「～と思います」で扱っている。
- 6) 日本語の直接話法・間接話法に触れる。
- 7) 引用の助詞「と」が会話では「って」となることについては【会話】で扱った。

第19課

- 1) 「んです」「んですが」は単なる言い換え練習にならないよう、言い訳や話を切り出すときの表現として使えるフレーズを練習する。使える場面が自然とわかるようになるのが理想である。

第20課

- 1) 連体修飾を理解させる。連体修飾の理解が難しい学習者もいるので、イ

ラストや平易な語彙を使ってわかりやすい練習を目指す。

- 2) 「普通体+の」「疑問詞+か」を本課で扱うが、学習者の混乱を招きやすいため使用頻度が高いと思われる「疑問詞+か」のみ取り上げ、「～かどうか」は取り扱わない。

第21課

- 1) 「とき」の練習は名詞と動詞・形容詞とに分けた。これは、「Nのとき」「V/A/NAの普通体+とき」という文型の違いを認識した上で習得できるように考えたからである。
- 2) これまでの経験から、「V-DICとき」「V-たとき」の違いは定着しにくいという認識があり、文型2の「動詞・形容詞+とき」では初めにその練習を入れた。
- 3) この課の練習では、代入や変換するものだけでなく、質問に対してオリジナルの答えを考えるものを多くした。初級後半に入り、自分で構文する力を付けていくことが必要だし、学習者にとっても練習に対する動機付けになるという考えからである。

第22課

- 1) 可能形のフォームの作り方と変換練習をし、次に対象の名詞を取らない動詞・取る動詞に分けて文を作らせる。対象の名詞への接続は「が」でも「を」でもよいとする。
- 2) 「見える・聞こえる・わかる」
絵を用いて、学習者の理解を助けるとともに、身近なことが表現でき、日本人の自然な会話が理解できるよう工夫した。
- 3) 可能表現を用いた各国事情などの問答練習では、助詞は「年齢+で」に統一した。

第23課

- 1) 命令形を取り扱う。命令形は実際に発話する機会は少ないが、理解できる知識はあったほうがよいと考える。緊急事態や標識では見たり聞いたりすることもあり、危険回避につながることもあるかもしれない。
- 2) 「静かにしろ」「静かにしなさい」「静かにして」「静かにしてください」が、それぞれどのような場面で使われるのか、個別に提示する。場違いな場面で使ったりすることを避けるような練習問題を工夫する。
- 3) 「なければなりません／なければいけません／なくてはなりません／なくてはいけません」を同時に提示する教科書もあるが、学習者が混乱し

てしまうので、この課では「なければなりません／なければいけません」のみを取り上げる。カジュアルな表現の「～なきゃ」も紹介しておく

第24課

- 1) 仮定条件の「～たら」を取り扱う。確定条件の「～たら」は扱わない。
- 2) 仮想表現「～たら」の練習は「もし～たら」の形で行い、仮想表現であることをわからせる。
- 3) 「～たら」を使った表現として、「どうしたらいいでしょうか」「～たらいいですよ」は日常会話で使用することが多いと思われるので、学生に身近な話題の中で練習させる。

第25課

- 1) 「てもらう」と「てあげる」「てくれる」3文型を取り扱うが、習得が難しいので、まず、文型1で「てもらう」と「てあげる」の違いを 図(→の方向)で示し、文型2で「てくれる」の→がいつも「私」に向かっていることを示した。
- 2) 「てやる」ほとんど使われていないということで取り上げない。

第26課

- 1) 自動詞・他動詞の対応を学習する。表示する場合、「食べます」「咲きます」のように自他の対応のないものもあることを示す。イラストを使用して学習者の助けにしたいが、必ずしも絵だけで十分とは言えない。印象付ける工夫が必要であろう。
- 2) 「Nが～ています」で結果の残存状態を表す文型を提示する。これについては学習者の定着が悪いことを市川(2008)が指摘しているが、あまり拘泥せずにさらりと練習させて先に進みたい。「～ているとの混同を避けるため、「～てある」については本書では扱わない。
- 3) 結果や変化に注目した表現「～ています」の理解を深めるには、取り立てて強調することにある。「この／その／あのNは～います」のように「この／その／あの」を使って周囲の状態を表現させる。
- 4) ①何かのために前もって何かをする、②終わったあと次の事柄のために何かをする、③そのままにする、の三分類にして示し「～ておきます」を理解させる。

第27課

- 1) 「ようになります／くなります」で 自分の経験が話せるようにする。(「日本に来て漢字が読めるようになりました」など)

- 2) 「と」は実際に使う機会は少ないかもしれないが、「たら」が使えれば、「と」「なら」「ば」は教えなくてもいいというのではなく、こんな表現もあるということで提示しておくことが必要である。機械の使い方の説明、道案内などの場面で教える。

第28課

- 1) 直接受け身と間接受け身のうち、いわゆる持ち物受け身を取り扱う。迷惑の受け身は扱わない。
- 2) 受け身文は学生に使用されにくい。受け身文について富田は (1) 視点をひとつに据える時 (2) 迷惑を間接的に表す時 (3) 情報価値の低い主語を省略して表現する時に使用されると言っているが、使用する場面を示して練習をさせることによって、受け身文使用の理解を深めさせる。練習3では迷惑その他感情を表す時に使うことを理解させる。

第29課

- 1) 文型の1と2で「ので」「のに」を対比しながら習得できるようにと考え、練習を同じパターンで作成した。学生が実際に使ったり、日常会話で耳にすることがあると思われる文を練習に用いた。

第30課

敬語表現について、尊敬語と謙譲語とを対比して図で示した。

- 1) 尊敬表現の3分類を A) おVになります B) 受身形と同形のもの C) 特別な形に3分類して示し、この順に提出し練習を行う。
- 2) 「おVになります」は定形は作りやすいが、敬意が高くなる。だれと誰の会話であるかを意識させる。ここでは、特に客として遇されるときや、会社の組織での会話を示した。また、この形を使った依頼や指示表現として「おVください」を練習する。「ここ」が「こちら」に変わることも意識させたい。
- 3) 「受身形と同形のもの」は、先に受動態のフォームを練習しているので、学習者には負担が少ない。敬意も高くないので、例文は研究室の話題を身近にいる先生や先輩と話すという場面を設定した。
- 4) 「特別な形」は新しく覚えなくてはならないため学習者が敬遠しがちであるが、難しいと感じさせないようにしたい。本課では、パーティーの初対面の場面での会話で練習する。

第31課

- 1) 謙譲語の特別な形をⅠとⅡに分けて提示。従来の謙譲語の特別な形の中

から、いわゆる「丁寧語」と呼ばれる「もうします」「まいります」「いたします」と、「ございます」をいっしょにして特別な形Ⅱとして別立てにした。特別な形Ⅰは理解語彙として知っていれば十分だが、Ⅱはあらたまった場面での自己紹介などで実際に使う機会があるかもしれないと考え、そのような練習問題を考えた。

- 2) 「お」と「ご」については、「お」と「ご」の使い分けだけでなく、耳にする機会があると思われる丁寧な表現を紹介した。

第32課

- 1) 「ようだ」は初級段階では様態の「ようだ」のみ取り上げられ、比喩を表す「ようだ」は取り上げられないことが多いが、わかりやすく、便利な表現であるので、取り上げた。
- 2) 原因理由を表す「ため」も初級では扱わない場合が多いが、使用頻度を考慮して取り上げた。

第33課

- 1) 初めに使役の文型をⅠ、Ⅱに分けて、使役文を使用する文脈を簡単に明示した。これは、文型を機械的に覚えるのではなく、それに含まれる二つ以上の意味を理解した上で、習得できるように考えたからである。

第34課

- 1) この課では使役受身を扱う。動詞グループ1のほとんどが「書かせられる」(長い形)と「書かされる」(短い形)のように2つの形を持っているので、フォームの変換練習では2つの形を覚えさせるが、一般には短い形が使われることを学習者に伝え負担を軽減させたい。例文は、日常的に使われる「歌わされた」「飲まされた」「待たされた」などに絞る。

第35課

- 1) 「～るところです／～ているところです／～たところです」は似た表現を一度に提示することによって、形や意味の違いがはっきりすると考えて取り上げた。
- 2) 「旅行なら、北海道がいいですよ」のような「なら」は、教えない。

第36課

- 1) この課では目的を表す「ために」と名詞の利益を表す「ために」を取り扱う。理由を表す「ために」は32課で取り上げている。

コミュニケーションな初級日本語教材の開発をめざして

試用版と主要初級教科書との対応表

- 1) 教科書覧の数字は該当する項目を扱っている課を表す。*はその項目を扱っていないことを表す。
- 2) 「SFJ」「みんなの日本語」は市川（2005）から転写した。
- 3) 「試用版」および「語学留学生」の対応表は市川に倣い作成し、※「命令」「～のようだ」（比況）は項目として追加した。
- 4) 「試用版」の文法項目は、本文で提示したものに限る。【会話】は含まない。

	文法項目	試用版	語学留学生	SFJ	みんなの日本語
1	～は～です	1	1	1	1
2	～の～	1・2	1・2・18	1	1・2・3
3	動詞文	3・4	5・6	2・3	4・5・6・20
4	格助詞	1・2・3・4・5・6・8・9・10・11・17・18・22・35	5・10	2・3・4・5・6・7・11・12	4・5・6・7・9・10・11・12・13・14・16・32・37
5	存在文	10	9	4	10
6	い形容詞・な形容詞1（非過去）	7	4	6	8
7	い形容詞・な形容詞2（過去）	7	8	6	12
8	動詞の活用	3・4・12・14	6・13・14	5・8	14・17・18・19
9	動詞のテ形	14	11	5	14
10	比較	9	20	10	12
11	指示語（こ・そ・あ・ど）	3	2・3	4・19	3
12	～（よ）う	18	26	16	31
	～（よ）うと思う	18	26	16	31
13	～つもりだ	*	26	19	31
14	～たい	8	10	7	13
15	～ほしい	8	10	17	13
	～てほしい	*	29	17	*
16	～てください	14	11	5	14
17	～ましょう	6	6	3	6
	～ませんか	6	6	3	6
18	～たほうがいい	24	30	12	32
	～てもいいですか <small>のみに</small>	*	18	8	15
	～たらいい	24	30	「どう～たらいい」12 「～たらどうか」24	26
19	～なければならない	23	19	23	17
	～なければいけない	23	19	「なくてははいけない」	*
20	～だろう	*	24	19	*
	～かもしれない	27	24	20	32
21	～そうだ（様態）	32	22	17	43
22	～ようだ	32	35	*	47
	～みたいだ	*	*	*	*
23	～らしい	*	*	22	*
24	～そうだ（伝聞）	32	35	19	47
25	～の（ん）だ	19	16	5・7	26
26	～はずだ	*	*	24	46
27	～わけだ	*	*	24	*
28	は（取立て助詞）	*	20	1・2・3・4・12 ・まとめ1*6	1・4・6・10・17・26・27
	が（格助詞）	8・17	8・9	2・まとめ1*6	10・12・14・16・22
29	～は～が文	17	20	10・13	9・16
30	も（取立て助詞）	1	1	1・3・13	1・5・6・10・19・27・42
	だけ（取立て助詞）	*	*	9	11
	しか（取立て助詞）	22	*	18	27
31	か（終助詞）	1	1	Introduction1・ まとめ2	1
	ね（終助詞）	19	*	Introduction1・ まとめ2	4
	よ（終助詞）	13	*	Introduction1・ まとめ2	5

32	ムード (モダリティ)				
33	～ている	15・26	12・22	8・13	14・15・28・29・31
34	～てある	*	27	15	30
	～ておく	26	27	15	30
35	～てくる	*	27	15	*
	～ていく	*	30	15	*
36	～てしまう	35	27	22	29
37	～てみる	*	27	15	40
38	～ところだ	35	33	23	46
	～(た)ばかりだ	35	33	13	46
39	～ことにする	*	*	23	*
	～ことになる	*	*	23	*
	～ようにする	27	29	21	36
	～ようになる	27	23	21	36
40	テンス・アスペクト				
41	意志動詞・無意志動詞	18	23	11	42
42	他動詞・自動詞	26	22	11	30
43	受身	28	34	17	37
44	可能	22	19	14	27
	～ことができる	16	19	18	18
45	ものやりもらい (授受)	11	7	13	24・41
46	動作のやりもらい (授受)	25	28・29	14	24・41
	使役	33	36	22	48
47	使役やりもらい	33・34	37・40	22	「させていただけませんか」の表現のみ
	使役受身	34	37	*	*
48	敬語	30・31	39・40	9・10・18	49・50
49	～と思う	17	17	11・19	21
50	～と言う	18	17	9	21
51	～という～	*	38	11	「～という本」のみ
52	疑問引用節	「疑問詞～かどうか」のみ20	17	18	40
53	～こと (名詞節)	16	15	16	18
	～の (名詞節)	20	14	10・16	38
54	名詞修飾節	20	18	10・13	22
55	～から	14	8	4・5	9
56	～ので	29	25	9	39
57	～ために	32	32	目的の「ため」23	42
	～ように	38	32	21	36
58	～が (逆接)	17	10	6・7	8
	～けれども	*	*	6・7	「けど」20
59	～て	14・22	25	5・8・14・15・17・21・22・24	16・34・39
60	～たり	15	15	16	19
61	～し	29	25	16	28
62	～前に	21	14	12	18
	～あとで	*	15	12	34
	～てから	21	11	12	16
63	～とき	21	18	8・12	23
64	～たら	24	21	11	25
65	～と	27	24	12	23
66	～ば	35	31	20	35
67	～なら	「N+なら、NA+なら」のみ35	31	4・24	35
68	～ても	24	21	24	25
69	～のに	28	25	24	45
	※命令	23	38		
	※～のようだ (比況)	36	35		

文法項目一覧

1課	<p>1 N は N です。</p> <p>2 N の N</p> <p>3 N は N ですか。 はい、 N です。 いいえ、 N じゃありません。</p> <p>4 N は 何／だれ／どこ ですか。</p> <p>5 N も N です。</p>
2課	<p>1 これ／それ／あれは Nです。 これ／それ／あれは 何ですか。</p> <p>2 それは 日本語で Nですか。 はい、そうです。／ええ、そうです。 いいえ、Nじゃありません。 Nです。</p> <p>3 だれのNですか。</p> <p>4 いくらですか。</p> <p>5 ○○円です。</p> <p>6 この／その／あのN</p>
3課	<p>1 ここ／そこ／あそこ は N です。</p> <p>2 Nは どこですか。</p> <p>3 場所 へ／に 行きます／行きません。</p> <p>4 きのう 場所 へ／に 行きました／行きませんでした。</p>
4課	<p>1 動詞</p> <p>2 Nを Vます。</p> <p>3 きょう／あした／毎日 N を Vます。</p> <p>4 きょう／あした／毎日 N を Vません。</p> <p>5 きょう／あした／毎日 N を Vますか。</p>
5課	<p>1 きょうは ○月○日 です。 あしたは ○曜日です。</p> <p>2 いつ Vますか。 (に) Vます。</p> <p>3 どこ で Vますか。 場所 で Vます。</p> <p>4 だれ と Vますか。 人 と Vます。</p> <p>5 何 で Vますか。 手段 で Vます。</p> <p>6 よく／ときどき あまり／ぜんぜん</p>
6課	<p>1 いま 何時 ですか。</p> <p>2 何時 から 何時 まで ですか。</p> <p>3 何時 に Vますか。</p> <p>4 どのくらい／ぐらい ですか／ Vますか。 何時間くらい ですか／ Vますか。</p> <p>5 N に 行きます／来ます。 Vます に 行きます／来ます。</p> <p>6 (いっしょに) Vませんか。</p>

7課	1 形容詞の現在形 過去形 否定形 2 形容詞の連体形 3 どんな N 4 どうですか。
8課	1 N は Aくて／NAで、 AI／NA です 2 N は AI／NAですが、 AI／NA です。 3 N が 好きです / きれいです。 上手です / 下手です 4 N が ほしいです。 5 V-ます + たいです。
9課	1 N と N と どちらが／どっちが A/NA ですか。 N のほうが A/NA です。 2 N (のなか) で Q が いちばん A/NA ですか。 N が いちばん A/NA です。 3 は より (ずっと) A/NAです。
10課	1 場所 に 人/動物 が います。 場所に 物 が あります。 2 人/動物 は どこ に いますか。 物 は どこ に ありますか。 3 いくつ ありますか。
11課	1 あげます／貸します／教えます／送ります／電話をします 2 もらいます／借ります
12課	1 V-DIC 2 V-た
13課	1 A/NA/N (普通体) 2 Q + A/NA (普通体) ? N は Q (普通体) ? 3 N は どう/どうだった? 4 A/NA/N (普通体) ? うん、_____。 / ううん、_____。
14課	1 V-て形 2 V1-て、V2-て、V3-ます。 3 V-てください。 4 V-ない形 5 V-ないで、 文 6 V-ないでください。
15課	1 今 V ています。 2 いつも／毎日 V ています。 3 V ています。 [V=持つ・知る・結婚する・住む] 4 V たり V たりします
16課	1 私の趣味は V-DIC ことです。 2 私は V-DIC のが好きです。 3 私は V-た ことがあります。 4 私は V-DIC ことができます。

17課	<p>1 N1 は N2 が A/NA 2 N1 は A/NA が、 N2 は A/NA N1 は V が、 N2 は V 3 N は Q か Q が ~ か いつ ~ か 4 普通体 5 文 (普通体) と 思います。</p>
18課	<p>1 Aく / NAに / NIに なります。 2 文 (意向形) と 思います / 思っています。 3 文 (普通形) と 言いました。</p>
19課	<p>1 (普通体) んです。 2 文 (普通体) んですけど / んですが。 3 とてもいいですか。</p>
20課	<p>1 文 (普通体) + N 2 (普通体) + の 3 Q + か</p>
21課	<p>1 N のとき、 V ます。 V-DIC / V-た / A-い / NA-な とき、 V ます。 3 V-てから V ます。 4 Nの / V-DIC 前に、 V ます。</p>
22課	<p>1 可能形 2 N(人) は V (可能形) 3 N(人) は N が / を V (可能形) 4 N が 見えます / 聞こえます。 5 N が わかります / わかりません。 6. V-て / A-くて / NAで / Nで、 文</p>
23課	<p>1 命令形 2 V-ます + なさい。 3 V-辞書形 + な。 4 V-て はいけません。 5 V-ない ければなりません / ければいけません。</p>
24課	<p>1 V-たら (if) 2 V-たら (when) 3 どうしたらいいでしょうか。 V-たらいいですよ / V-たらどうですか。 4 V-たほうがいい。 5 V-ても</p>
25課	<p>1 N1 は N2 に (N を) V-てもらいます。 V-てあげます。 2 N(人) は (私を) V-てくれます。 (私に) N を V-てくれます。 3 N1 は N2 に V-ていただきます / V-てさしあげます。</p>
26課	<p>1 他動詞 ・ 自動詞 2 N が 自動詞 V_i-て います。 3 この / その / あの N は 自動詞 V-て います。 4 V て おきます。</p>

27課	<p>1 V (辞書形／可能形) ように になります。</p> <p>2 V-ない くなります。</p> <p>3 V-辞書形 と、 文</p> <p>4 Aい／NAだ／Nだ と、 文</p> <p>5 普通体 かもしれません</p>
28課	<p>1 直接受け身</p> <p>2 間接受け身 (持ち物受け身) …迷惑の受け身は入れない</p>
29課	<p>1 V / A (普通体) ので、 Vます。 NA / N なので、 Vます。</p> <p>2 V / A (普通体) のに、 Vます。 NA / Nなのに、 Vます。</p> <p>3 普通体 し、普通体 し……。</p> <p>4 V-ます + ながら、 Vます。</p>
30課	<p>1 お + Vます + になります。</p> <p>2 お + Vます + ください。</p> <p>3 尊敬形 (受身形と同じ形)</p> <p>4 特別な形</p>
31課	<p>1 お(ご) + V-ます + します／いたします。</p> <p>2 お + V-ます + しましょうか。</p> <p>3 特別な形 I</p> <p>4 特別な形 II</p> <p>5 お／ご + 名詞</p>
32課	<p>1 そうです (様態)</p> <p>2 そうです (伝聞)</p> <p>3 ようです (様態)</p> <p>4 ようです (比況)</p> <p>5 ために (原因、理由)</p>
33課	<p>1 N1は N2を V (自動詞) (さ) せます。</p> <p>2 N1は N2に Nを V (他動詞) (さ) せます。</p> <p>3 N1は N2を V (さ) せます。</p> <p>4 N に (を) V (さ) せてください。 / V (さ) せないでください。</p>
34課	<p>1 N は N に Vさ(せら)れます。</p> <p>2 Vて いただけませんか。</p> <p>3 V (さ) せていただけませんか。</p>
35課	<p>1 V-た ばかりです。</p> <p>2 V-辞書形 ところです。 V-ている ところです。 V-た ところです。</p> <p>3 V-て しまいます。</p> <p>4 ば形</p> <p>5 V-ば いいです。</p>
36課	<p>1 ために (目的・利益)</p> <p>2 ように</p> <p>3 ~に使います／役立ちます／便利です／いいです。</p>

5. 反省と課題

以上述べてきたように、私達は今回の新教材を作成するに当たって、全員で『コミュニケーションのための日本語教育文法』を読み、ここから学んだことに基づいて、学習項目（シラバス）の決定まで時間をかけて十分に話し合ったつもりであった。そして、作成を開始してからは、ただ項目を覚えるだけの文法ではなく、「日本語でコミュニケーションするときに必要な文法」であること、練習で使用する語彙は、学習者が大学や日常生活で必要となるものを選ぶこと、実際に発話しそうな文、自然な会話に近い文を練習問題にすることなどを意識しながら作業を進めてきた。

大筋では一貫してこの方針を通してきたと言えるが、「1. はじめに」で述べたように、作成途中において揺らぎが生じたこともあった。例えば、いわゆる文法積み上げ式の一般的な教科書で取り上げられている項目を、削ってしまったことが不安になり、振り出しに戻って同じ議論を繰り返したことが何度かある。あるいは、「コミュニケーションな内容」にこだわるが故に、これまでの教科書とはかなり異なる編集をしている課（7課、12課、31課、33課等）もあり、この形は学習者にとって学習しやすいかどうかと考え始めて、行き詰まってしまったこともある。この点については、実際に試用してみなければ結論は出せないで、今後の課題ということにしている。また、使用語彙の選択や練習の組み立てについても、一貫して基本方針通りにやっているかと問われれば、従来の教科書と同じような形になってしまった課もあると言わざるをえない。さらに、学習項目を決めた時点では、各課の内容のバランスを考えて決定したつもりであるが、実際に練習を作ってみると、課によって内容の軽重が出てしまったのも事実である。ただ、これは各課に掛ける時間を調整すれば解決できるという判断で、バランスを取るために内容を変更することはしなかった。

「コミュニケーションするときが必要であり、役に立つ文法」の教科書を作るという私達の初志は今も変わらないが、志を形に成すのは予想以上に難しいということ、この2年半の間に実感させられた。作成に入る前にもっと時間をかけて議論すべきだったということもあろうが、新教材は使いながら修正を加えていくしかないという側面もあるであろう。⁽²⁾ 新学期からスタートする新クラスで試用しながら、学習者や教授者の声に耳を傾け、改訂を重ねてよりよい教材作りを目指していきたい。

注

- (1) 2008年度は、初級文型クラスで使用された。
- (2) 国際交流基金『教材開発』参照。

参考文献

- 市川保子（2005）『初級日本文法と教え方のポイント』スリーエーネットワーク
国際交流基金（2008）『教材開発』ひつじ書房
富田秀夫（2007）『日本語文法の要点』くろしお出版
野田尚史編（2005）『コミュニケーションのための日本語文法』くろしお出版
第二言語習得研究会（2007）「第二言語習得研究と教材作り」（第二言語習得研究会全国大会（於九州大学）資料）

参考教科書

- 筑波ランゲージグループ（1992）『SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANE』凡人社
岡本輝彦他（2002）『語学留学生のための日本語』凡人社
石原嘉人・副島健作（2005）『琉大で学ぶ日本語』琉球大学留学生センター